

人は繋がり、助け合います。伝統的な家族制度「ティオパシエ（拡大家族）」は生きており、孤児や孤老を作りません。持つものは与えます。気前の良さがなよりの美德です。だからこの貧しい社会で、文字通り与え尽くす「ギブアウェイ」の儀式は、いまだになくなっていないのです。ギブアウェイで提供したギフトが巡りめぐって、また自分のもとに戻ってくることも珍しくありません。尊敬に値するのは、モノに執着しない人なのです。

人を動かすものは、利害や経済効率だけではない。そんな理屈では分かっていることを、私に納得させてくれたのは、この合衆国の最貧地帯でした。

昨年、小学館から『ともいきの思想』を出しました。これまでアメリカ先住民社会に関する多くの論文を書き、また著書を出してきましたが、私は本書で、初めて自分の

個人的な体験と想いを語りました。光と影が交錯する保留地社会での経験は、好ましいことばかりではありません。私自身がそれら経験の中でどう葛藤し、折り合いをつけ、また何を学んだかを、書いたつもりです。文庫版の小著ですが、その意味で自分

にとって記念碑的一冊になりました。偶然に見える縁に導かれて、インディアンの社会に入り、想いを結晶化するのに20年かかりました。だがそれは私にとって必要な「とき」であったことに間違いありません。



パウワウ（ダンスコンテスト）

留学動向とグローバル人材育成への課題

横山匡 言語学 '83

(アゴス・ジャパン代表取締役)



昨年、UCLA日本同窓会の年次総会で John Wooden コーチについて語る機会を頂いてから一年、留学市場の変化を感じ、国際人材育成と学生活動の応援・支援に関わる機会が増え、UCLA Extension Tokyo Center開設に関わり、と私にとってもいくつかの大きな変化がありました。そして、UCLA日本同窓会メンバーの皆さん一人ひとりが、グローバル社会における次世代応援において「違いを、変化を生める人材」ですので、わたしがこの一年で感じたこと、見てきたことを少し共有させていただければと思います。2年連続の登場で僭越ですが、原稿依頼を受けさせていただきました。

まず、はじめに留学希望者の市場に関しては、留学フェアに参加する人達の数は明らかに戻ってきていることを感じています。アゴス主催のイベント、その他の留学関連イベントは昨年比でも2割から3割も参加者が増えています。80年代の頃見た「留学ブーム」は「留学したいから行く」でしたが、

今の留学志望者の動機は「留学しないとまずそうだから考える」と言う段階で、おそらく高校生たちがアメリカのトップ大学などを目指すと言うアクションに繋がってくるのは1-2年後であろうと思います。では、今現在アイビーリーグをはじめ、われらUCLAのような上位校への留学生はどうかというと、学部レベルではまだまだ増えていない中MBAや大学院レベルにはそこそこの留学生がいます。しかしそこでも審査基準の中における「英語力とコミュニケーションスキル」への要求が明らかにこの2-3年で高まっており、日本からの留学希



望者が苦戦している状態が起きているのも事実です。アジアにおける TOEFLスコア平均点は調査31か国中29位、平均点は67（120点満点）で、シンガポール 99、インド 90、韓国 81、スリランカ 81、中国76、と比べても勝負になっていないのが現状です。留学相談の場でよく聞かれる「でも、もともと英語で教育を受けている国とは比較できないですよ」と言う声は、もう通用しません。相手にとって、それは無関係なことです。出来るか出来ないか、それが審査対象です。

そして、さらに追い討ちをかけるのがコミュニケーション能力です。講演などで学生向けに「国際人材の条件とは」と言うようなテーマで依頼を受けると、「そんなものがあるのかな〜」と思う反面、「どこでも普通に自分らしく振舞えること」は一つの条件だと感じこんな4項目を話します。

- 1) 深いレベルでの自己理解と自分の言葉で語る姿勢。